

第 23 回ステディツアー感想

2023 年 8 月 15 日

第 23 回スタディツアーのいちばんの任務は、今後の支援の方向性について、タリクさん、ヤスミンさんに提示し、意見交換をすること。

これまでワンドロップは先生らのサラリーと生徒らのランチ代金を負担してきた。施設設備に関する費用等はタリクさんが負担してきた。しかし、将来的にはワンドロップ小学校の運営費は Bangladesh の側で負担し、学校運営も現地に任せることを目標としてきた。



今回の提案は、現在のような形での支援は 2025 年 1 月で終了する。具体的には、2023 年 12 月でランチ代金は終了する。先生サラリーは 2024 年 12 月で終了し、2025 年 1 月からはサラリーと給食費ともに Bangladesh サイドで負担する。ただし、ワンドロップの活動が続けられる間、バザーでのカレー、物品の販売や講演会、寄付等で得られたお金はワンドロップ小学校の運営資金として支援していく。

毎年 100 万円以上を負担してきた分を Bangladesh の側で負担することができるのか、話はそう簡単にまとまるとは思えない。今回のスタディツアーは大西さんとぼくだけの参加。相変わらず言葉がわからないのに話し合いに同席しても議論に加わることはできそうにない。幸い日本の大学に留学しているロシミアさんが夏休みで帰省し、スタディツアー期間中ずっと張り付けてくれることになっていて、ありがたかった。

8 月 4 日（金）早朝タリクさんのマンションに到着。

仮眠。支援金についてタリクさんとの話がどうなるか一日気をもむ。夜 8 時 30 分、ヤスミンさんも参加して話が進められた。ロシミアは日本語、英語、ベンガル語の通訳者。しかし、話は深刻なテーマ。ぼくのために逐一日本語に通訳してもらえるような話ではない。大事な議論なのに、ぼくは全く加わることはできない。合間あいまに日本語にしてくれるロシミアの言葉から、議論の進み具合を感じ取るくらいしかできないのが情けない。

タリクさんも、ヤスミンさんもワンドロップの提案について趣旨としては同意してもらえたようだけど、ワンドロップが負担してきた分をどうするか、そう簡単に解決策が見つかるはずはない。

具体的にどうするか。タリクさんは現在お茶の栽培加工を手広く進めていて、その事業が成功したとしても学校運営資金をすべてタリクさんが負担できるかどうか不安である。タリクさんの意見として、1200 万円の銀行預金があれば、その利子分で運営資金がすべてまかなえる。自分も知人で財力のある何人かに頼める。一人 30 万円、日本側でも 40 人集められれば、と言う。

ヤスミンさんからは、ワンドロップ小学校を公立学校に移行することができれば、先生らのサラリー他、運営費はいらない。しかし、ランチはない。現任の先生らが採用してもらえるかどうかもわからない。教育内容もワンドロップが目指すものは望めない。（タリクさんは、ガバメントの知人に公立学校への移行が可能かどうか、さっそく問い合わせたそうだ）

ロシミアは、ネットを使ってワンドロップ小学校について広く発信して支援を募る。発信の作業は自分が担当する、と言っている。

ワンドロップサイドとしては、一人 30 万円の拠出は容易なことではないが、2025 年以降も国内での活動をこれまで通り続けて支援金を集めることに努力する。



「自立」

これからはワンドロップ小学校の運営は、資金面でも学校運営の面でもバングラデシュが自立して行っていく。「自立」という言葉を頭の中で繰り返しているうちに、ぼくはワンドロップの活動に自立して関わっていたのか、ということに思い至った。リーダーの大西さんに企画、立案、実行、すべてにわたって任せっきりになっている。ぼくは一貫してお手伝いをしている立場。決められた活動を、自分にできる範囲で手伝う。活動の責任はリーダーに押し付けている。

スタディツアーには、いつも嫌々と言いながらほとんど欠かさず参加してきたが、チケットを取ること、ビザを申請すること、期間中のあらゆる手配についても、みんな人任せ。ベンガル語はもちろん英語も話せないから、タリクさんや先生方との意見交換は大西さん任せ。生徒の名前もまったく覚えられず、これは岡さんに頼っている。

もし大西さんが動けなくなったら、日本での活動はなんとか皆で協力して続けていくことは可能だが、バングラデシュでの活動はまったくできそうにない。個性の強いタリクさんらと対等に意見交換し、議論できることがこの活動では欠かせないが、ぼくはもちろん、他のメンバーでもほとんど無理だと思っている。

ワンドロップは、リーダーの大西さんから「自立」できていないのだ。ぼくらは決められたことに対して、それぞれができる範囲のお手伝いはするけれど、責任はとらないという位置で関わっている。極論すれば、大西さんが活動できなくなったときは、ワンドロップ小学校は無くなる。

「モグラの自立」

ぼくの生き方そのものが「自立」できていないのだという個人的なことを考えてみた。

解放教育の先進校と言われていた湊川高校で、被差別部落出身生徒、在日韓国朝鮮人生徒らとの関りについて厳しく問われ続けてきた。被差別の側の生徒らとまっとうに向き合えていない自分を情けなく思い続けた 30 余年だった。部落の生徒に向かって「出身を明かして強く生きよう」、在日の生徒に「本名を名乗って生きよう」と迫ることは、彼らの生き方すべてにわたって責任をとれる人間であるのかが自分に問われることなのだ。解放教育を進める被差別部落出身のリーダーを前にして、ぼくはいつもビビっていた。

そんな中でも、自分が担当した生徒らとは、世間の高校教育には制約されないところで有意義な教育活動をさせてもらっていた。部落出身、韓国朝鮮人、ベトナム難民、聾者、夜間中学出身者、自閉症の生徒らと関わって、目いっぱい楽しい学校生活を送ってきた。

しかし、人間性を厳しく問われる場面で、ぼくは「自立」的に向き合ってきたとい

うことが、いつも自分の意識の中にある。ぼくの見る夢は楽しいことはめったにない。いつも窮地に立たされて焦りまくっている夢ばかり（笑）。

ぼくは今、日本語教室に関わって、ベトナム人をはじめ多くの外国人と楽しい関りが持っている。自分の嫌だと思ふことはしない、思想信条も自分の中にちゃんと持っている。とは思っているが、その姿勢もあらためて問うてみると、とても「自立」しているとは言えない。湊川高校時代、リーダーの教師から「お前はモグラだ」と言われたことがある。困ったとき、すぐに自分の巣の中にもぐり込んで、周りからの批判、攻撃から自分の身を守ろうとしている。どうやら、今やっている楽しい活動でも、自分を厳しく問われる場面は避けて、モグラの巣の中の自由を楽しんでいるに過ぎないのではないのか、と。

バングラデシュの側の「自立」ということも深刻な問題だけど、リーダーの大西さんがいなくなったら、「自立」できていない私たちメンバーだけでワンドロップの活動は不可能だということも問われているのだと思う。

〈今回の活動〉

今回はコミッタの活動中ずっと雨。道路が川のように水浸しになるドシャ降りの時もあった。雨の中、生徒らはほとんど欠席なく登校していた。タリクさんは「今日は雨で何人生徒が来ているかわからないよ」と言っていた。デング熱にかかって体調不良の先生もいたが、休まずに来てくれた。

現在、1年16人、2年18人、3年16人、4年12人、5年12人。この間、1年と4年に1人ずつ（4年の子は、3年までワンドロップ小学校にいた）増えた。

バングラデシュから報告される毎日のランチ喫食者数から見て、かなりの生徒が学校に来られていないのではと思っていたが、日本人が来てくれるというので雨の中休まずに来てくれたようだ。

チャイムが授業時間に合わせて大きく鳴り響いていた。サンダルが廊下にきれいに並べられていた。教室もきれいに掃除されていた。感激。

タリクさんから送られてくる写真の生徒らはいつも笑顔がないけれど、ぼくらの前では笑顔いっぱい。

今回はツアーの参加は2人だけ。しゃべれないし、歌もうたえない。何かを教えてやることもできないけど、ぼくにできることは何かしなければ、と準備していた。

5年生に折り鶴で飾りを作る。3年生でブンブン駒。2年生は新聞紙で兜を作る。

全学年では、一人ひとりの個人写真を飾り付けてラミネートする。ラミネートの機械が電圧の違いで壊れてしまい、アイロンを借りて代用した。

8月7日（月）保護者会

3限、授業参観。雨の中42人もの保護者が来てくれる。前回の授業参観のときは数人しか来ていなかった。ランチ目当てに来るかも、とつまらないことを考えていたが、保護者はみんなワンドロップ小学校に関心があって、子どもがどんな勉強をしているのか見たい。ラ



ランチはどんなご飯を食べているのか、自分も食べてみたい、そう思って来ている。

保護者が三々五々集まってくる。言葉がわからないから声をかけることができない。みんな硬い表情だ。そろそろ入ってきて、挨拶もできず、だれがだれの親かもわからないので教室を案内してあげることができない。お互いぎこちない。



授業参観をして、自分の子どもと一緒にランチを食べた。そのあと全学年の保護者に集まってもらって懇談会。各先生方から保護者への話のあと、大西さんからこの学校の教育目標について説明。ロシミアの通訳が本当によかった。彼女は生徒に英語を教える時も、保護者と対面していても堂々としていて、すっかり先生らしくなっている。

大西さんから親へのアピール。

1. 子どもを学校に来させてください。
2. 子どもの通学バッグの中をチェックしてください。
3. 制服をきれいにしてください。
4. 家に帰ったら、今日学校でどんな勉強をしたか、宿題はないか、など聞いてってください。
5. もし子どもに何か問題があったら学校に連絡してください。



実際の生活で、親は言われるようなことをする余裕はないだろうけど、大西さんの話にしっかり前を見て、肯きながら聞いていた。親たちは、学校にも行けず、字も読めず、小さい時から働きに出され、家事をさせられてきた人たちだ。その彼らの表情を見ていて、親たちはこの学校に期待を寄せ、子どもたちがここで勉強できていることを応援しようという気持ちを強く持っていると感じた。

8月9日（水）学校最終日

今日は何もしないで、先生や子どもたちの様子を見てからお菓子のプレゼントをしてバイバイする予定だった。大西さんがタングラムをしようと言い出した。図形の仕組みが理解できない生徒も多いなか、どんどん図形を組み合わせて得意になっている生徒も数人いる。タングラムはぜひ先生らの授業に取り入れて欲しいと思った。

8月10日（木）ナワブゴンジュへ

ヤスミンさんは活動が忙しくて参加できず。ホテルの車の手配ミスで渋滞の中 1 時間走ったところで呼びもどされて往復 2 時間のロスタイム。今夜は 10 時半にチェックアウト。時間がなかったら奨学生に会えなくても仕方ないと思っていたが、奨学生全員と会うことができた。みんなは 3、4 時間も待っていてくれたそうだ。明るくて元気な顔を見ることができて本当によかった。面談に 1 時間余、いつものおいしいバングラデシュの料理をいただいて 30 分。

夜はダッカの奨学生とホテルで会う。6 時、ジャナットと祖父。7 時半、アキ、ナジマ、アカシと会う。彼らから支援者へ送るビデオメッセージ録画の場面がとてもよかった。

今回のスタディツアーは 1 週間ほど。いつもより少し短かったけど、これぐらいが最適。コロナにも感染せず、デング熱にも罹らず無事に帰って来られた。（山中 勇）